

韓国人日本語学習者の発音学習過程における動機づけ

早稲田大学大学院日本語教育研究科 金 秀珍

第1章 序章

本研究の目的は、発音学習過程における学習者の意識と学習行動の変化に注目し、韓国人日本語学習者の発音学習の動機づけを明らかにすることである。その上、日本語音声教育において、日本語の発音学習者の学習目標を達成させるため、学習者の動機づけにどのように配慮し、指導を行うべきかを示唆する。

筆者は韓国の大学で日本語を専攻し、3年間学習してから、来日したにも関わらず、日本語の発音を学習したことがなかったため、発音をどのように学習すればよいのかがわからなかった。そこで、来日後、通っていた某大学で「発音」の授業を受講した。その授業を通して、日本語の発音に対する知識を得て、発音指導を受け、自分の発音が少しずつ変化していくのを感じた。その後、発音を練習し、指導を受けるといった「発音」の授業は、帰国後受講できなくなり、ひとりで発音学習を続けた。ところが、発音に関する授業や学習リソースなどが少ない韓国でどのようにして学習を続ければよいかわからなかった。それゆえ、発音学習を始める時の学習目標は達成できていないにも関わらず、少しずつ発音を学習することがおろそかになっていった。そのようなことは、将来日本語学習者に、より正確な発音で日本語を教えたいと思っている筆者にとっては、大きな障害になっていた。そこから、筆者は、学習者が自分の発音の学習目標に向けて、学習を続けるたのに必要な動機づけについて疑問に思うようになった。

戸田(2008)は、「発音」コースの1216名の受講生を対象に受講動機を調査した。戸田の調査の結果、学習者は「発音の問題がコミュニケーションの弊害になる」ということを実生活の中で経験していたことが明らかになった。しかし、戸田の研究では、「コミュニケーション弊害」という発音学習動機を持っているという報告に終わっており、そのような学習動機を持った上で学習者一人ひとりが継続的に発音学習とどのように向き合っているかは明らかになっていない。また、他の先行研究においても、前述した疑問に対する答えは見つからなかった。それゆえ、本研究では、以下のような研究目的のもとで、以下のような研究課題を明らかにしていきたい。

本研究の研究課題は、以下の2点である。

1. 発音学習過程における学習者の意識と学習行動はどのように変化するのか。
2. どのような要因が、その変化に影響を及ぼしているのか。

第2章 先行研究

第2章では本研究の研究課題に関連する先行研究をまとめた。

学習者の個人差要因の中で、動機づけは、第二言語教育において、学習を成功に導くための重要な要因の一つであると考えられている(Oxford1996、Dörnyei1998など)。それは、動機づけの要因が、学習成果、学習の継続性を考える上で、重要な役割を果たしていると考えられるためである。外国語学習者を対象とした動機づけ研究は、主に質問紙を用いて1960年代から行われたが、当初は動機づけは安定した特性(個人の性質)として捉えられていた(Gardner・Lambert1972など)。1990年代以降、状況論的学習論や認知論の影響から、動機づけは外的・内的な要因によって、大きく変化する特性であると考えられるようになった(Dörnyei2001)。

これまでの日本語学習者の動機づけの研究では、統合的動機づけと道具的動機づけのどちらを強く持っている(縫部・狩野・伊藤1995、倉八1993、岩井1993など)か、どちらが成果と結びついているかを見る研究(成田1998、郭・大北2001など)が多かった。ところが、発音指導があまり行われていない韓国の日本語学習者は、韓国で目標言語である日本語と接触する機会が少なく、また発音指導の機会が少ないため、発音学習の動機づけの構造を統合的動機づけ・道具的動機づけの二項対立で捉えようとするには限界がある。

また、その後、教育心理学における「達成動機づけ理論、自己決定理論、原因帰属理論」などの理論に基づき、動機づけと他の学習要因との関連について研究されてきた(李2003、守谷2004、大西2011など)。しかし、様々な地域における動機づけ調査では一定した結果が出ていない。また、日本語音声教育における動機づけと関連のある研究では、学習者がコミュニケーションでの困難などの問題から、発音学習をし始めるといった、学習開始時の学習動機づけを明らかにした(戸田2008、小河原1998)。しかし、鹿毛(2006)が指摘するように、学習者は統合的動機づけ、または道具的動機づけのどちらを強く持っていたり、完全に失ったりするわけではなく、学習の過程において、動機づけの濃淡は変化する

と考えられる。そこで、本研究では、学習者の学習過程における意識や行動の変化に注目し、教室環境に限らず自然な言語学習環境での学習の動機づけに関する考察を行う。

また、前述した学習動機に関する先行研究では、主に授業の開始前に選択式の質問紙調査を行い、量的分析法で研究されてきた。本研究では、発音学習過程での学習動機に関する意識や行動の変化を自由記述の質問紙調査法とインタビュー法を用い、質的に分析を行う。その理由は、以下のとおりである。これまでは、各々の学習者が持つ発音に関する学習動機や学習過程は違うにも関わらず、これまでの学習動機に関する研究では、質問紙調査により一括的に行われてきた。これについて小西(2006)は、「調査者側から押しつける質問項目に答えるよう求めるのみでは不十分な側面がある」と言う。また、Dörnyei(2001)、Creswell(2003)も「どのような学習を望んでいるかといった質問に対して、質問紙調査の中でも自由記述の欄を活用したり、教室に出かけて行って学習場面の観察を行ったり、対象となるグループから数名を抽出してインタビューを行ったりするなど、自発的に質的研究データの形で思いが伝えられる研究手法も並列して活用すべきだ」と述べている。

したがって本研究では、前述した先行研究とは違った視点、調査方法を用い、分析を行う。そこから、様々な発音学習動機を持っている学習者が、その学習動機をどのように維持しつつ、発音学習と向き合っているのかという学習実態が明らかになるだろう。さらに、日本語の発音学習に対する学習動機や動機づけを検討することができ、学習者の学びを促す動機づけの方法と教育者側の役割に関する示唆が得られるだろう。

第3章 研究方法

第3章では、研究対象、調査方法、データ分析を述べた。

本研究は、本研究の目的を明らかにするために2つの調査を行った。まず、本調査の前に、調査協力者の潜在的に持っている発音学習過程における意識を引き出すことを目的として、事前に質問紙調査を行った。次に、インタビュー調査を行った。インタビュー調査の協力者は以下の4名である。

仮名	性別	年齢	生育地	日本語の レベル	日本語 学習歴	日本語の 発音学習歴 ¹	日本 滞在歴	所属
ヨン	女	21	ソウル市	中・上級	5年11ヶ月	2年	9ヶ月	交換留学生
ソミ	女	22	ソウル市	上級	5年	3年	9ヶ月	交換留学生
フニ	男	25	忠清道	中・上級	4年10ヶ月	5ヶ月	5ヶ月	交換留学生
ジナ	女	31	京畿道	中・上級	6年9ヶ月	4年	4年	大学院生

4名の調査協力者に、「発音学習過程における動機づけ」を、半構造化インタビューで語ってもらった。それぞれの協力者に対し1時間程度の個別インタビューを行った。分析観点は、「発音学習過程における学習者の意識と学習行動の変化」と「発音学習過程における動機づけの要因」という点である。尚、分析データは、事前質問紙とインタビューの文字化資料である。

第4章 分析結果

第4章では、4名のインタビュー調査の結果および分析について記述した。

4.1 ヨンさんの発音学習過程における動機づけ

ヨンさんの意識と学習行動は、[他者からの指摘][他者との比較][学習環境の変化][フィードバック][学習成果に対する肯定的な意識]という5つの動機づけの要因により、循環的にお互いに影響を与え、変化していくことが明らかになった。

4.2 ソミさんの発音学習過程における動機づけ

ソミさんの意識と学習行動は、[他者との比較][他者からの指摘][学習環境の変化][フィードバック][学習成果に対する肯定的な意識]という5つの動機づけの要因により、循環的にお互いに影響を与え、変化していくことが明らかになった。

4.3 フニさんの発音学習過程における動機づけ

フニさんの意識と学習行動は、[学習環境の変化]、[授業からの刺激][学習成果に対する否定的な意識]という3つの動機づけの要因により、循環的にお互いに影響を与え、変化していくことが明らかになった。

¹ 日本語の発音を意識し、ひとりで又は、授業を通して、発音を練習したり、音声学に関する知識を得たりするなどの学習をし始めた時から現在までの期間。

4.4 ジナさんの発音学習過程における動機づけ

ジナさんの意識と学習行動は、[他者との比較]、[他者からの指摘]という2つの動機づけの要因と[学習成果に対する否定的な意識]、[フィードバックの問題]、[学習リソースの不足]という学習の妨げになっている要因により、循環的にお互いに影響を与え、変化していくことが明らかになった。

第5章 考察と結論

第5章では、本研究の分析結果を総合的に考察し、本研究の結果を述べた。また、本研究の結果から日本語教育への示唆を行い、今後の課題について記述した。

5.1 総合的考察

5.1.1 発音学習過程における学習者の意識と学習行動の変化

5.1.1.1 学習開始時の意識

発音学習への動機づけには、[コミュニケーションにおける困難][他者からの指摘][他者との比較][授業からの刺激][韓国人なまりのある発音]といった要因があることが明らかになった。

5.1.1.2 発音学習への取り組み

発音の学習への取り組みは、動機づけによって、より具体的及び積極的に変化することが明らかになった。

5.1.1.3 学習成果に対する学習者の意識

動機づけによって、学習への取り組みの様子が同じであっても、学習成果に対する学習者の意識が異なるということが明らかになった。すなわち、動機づけにより、学習成果に対する意識が変化したのである。

5.1.2 発音学習過程における動機づけの要因

本研究では学習者4名を対象に調査を行った結果、4名それぞれの発音学習における学習意識及び行動の変化に影響を与える要因、すなわち、動機づけが明らかになった。その動機づけは、学習者によって様々であるが、学習にどのような影響を与えるのかにより、[学習成果に対する学習者の意識]、[学習環境の変化]、[他者の存在]、[フィードバックの内容]という4つの共通の要因が見られた。

5.2 結論

本研究から、以下の2点が明らかになった。

(1) 本研究の結果、学習者自身の発音学習過程におけるそれぞれの動機づけが、学習者の意識や学習行動に、循環しながら相互に影響を与え、変化していくことが明らかになった。

(2) 発音学習過程において、動機づけになっている要因として、次の4つの共通した要因が見られた。[学習成果に対する意識][学習環境の変化][他者の存在][フィードバックの内容]が共通した要因である。以上の4つの要因から、学習者は、発音学習に動機づけられ、その動機づけによって学習目標を達成するための学習が継続できるということが明らかになった。

5.3 日本語教育への示唆

(1) 学習成果に対して意識ができるような適切なフィードバックが必要である。本研究の結果、発音学習過程において、学習者の学習成果に対する意識が発音学習の動機づけになっていることが明らかになった。そのため、学習者が発音学習の後、その学習成果を適切に判断できるよう、その学習成果に対して意識させるフィードバックが必要である。また、その内容は、間違いをただ指摘するだけの単純なフィードバックとは異なるべきであろう。

(2) 学習環境に対する意識の転換が必要である。一般論として日本語教育の現場では、学習環境というのは、変えられない学習者要因として認識されていることが多い。しかし、本研究の成果から、学習環境は、学習者自身や教師によって、変えられる要因であることがわかった。このように、学習者側と教師側の間で、学習環境に対し、意識のギャップがあるということが浮き彫りになった。このギャップを埋めるためには、教師側も学習環境は変えられる動機づけの要因であることを意識し、学習者がより適切なフィードバックがもらえるような環境、学習リソースが豊富な環境を創り上げる必要がある。

5.4 今後の課題

(1) 本研究の結果、学習者の意識と学習行動は、動機づけにより、循環的に互いに影響を与え、変化していくことが明らかになった。今後は、どの段階で、どのような動機づけ

が働いているのかを明らかにしていきたい。

(2) 教育心理学の理論が第二言語習得や日本語教育の研究の分野で、学習過程における様々な学習者要因を検討する際、有効であると認識され、取り入れられている。そのような、教育心理学の多様な理論の観点から、発音学習の動機づけを研究していきたい。

参考文献

- 石井秀幸 (1993) 「日本語学習者の学習意欲を構成する因子の分析」 『平成7年日本語教育学会春季大会予稿集』 pp. 1-6.
- 李 受香 (2003) 「第2言語および外国語としての日本語学習者における動機づけの比較—韓国人日本語学習者を対象に—」 『世界の日本語教育』 第13号、pp. 75-92.
- 大西由美 (2011) 「目標達成見込みの高低と動機づけの関連—ウクライナにおける日本語専攻大学生の動機づけ調査—」 『国際広報メディア・観光学ジャーナル』 第12号、pp. 21-40.
- 小河原義朗(1998) 「日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討」 『言語科学論集』 第2号、pp. 1-12.
- 郭俊海・大北葉子(2001) 「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」 『日本語教育』 第110号、pp. 130-139.
- 倉八順子 (1993) 「日本語学習者の動機に関する調査—動機と文化的背景の関連—」 『日本語教育』 第77号、pp. 129-141.
- 小西正恵 (2006) 「3動機・態度」 津田塾大学言語文化研究所 言語学習の個別性研究グループ (編) 『第二言語学習と個別性—ことばを学ぶ一人ひとりを理解する—』 春風社.
- 鹿毛雅治 (2006) 『教育心理学』 朝倉書店.
- 戸田貴子 (2008) 「日本語学習者の音声に関する問題点」 『日本語教育と音声』 くろしお出版.
- 成田高宏 (1998) 「日本語学習動機と成績との関係—タイの大学生の場合—」 『世界の日本語教育』 第8号、pp. 1-11.
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩(1995) 「大学生の日本語学習動機に関する国際調査—ニュージーランドの場合—」 『日本語教育』 第86号、pp. 162-172.
- 守谷智美 (2004) 「日本語学習の動機づけに関する探索的研究—学習成果の原因帰属を手がかりとして—」 『日本語教育』 120、pp. 73-82.
- Creswell, J.W. (2003) Research Design. 2nded. Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.

Dörnyei, Z. (1998) Motivation in second and foreign language. *Language Teaching* 31、
pp. 117-135.

———— (2001) *Motivational Strategies in the Language Classroom*, Cambridge: Cambridge
University Press.

Gardner, R.C., and Lambert, W.E. (1972) *Attitudes and Motivation in Second-Language Learning*.
MA: Newbury House.

Oxford, R.L. (1996) *Language Learning Motivation: Pathways to the New Century*. HI:
University of Hawaii Press.